

年間第十八主日

2016.7.31

ルカ 12・13-21

今週の木曜日 8月4日はわたしたち高円寺教会の保護の聖人である聖ビアンネの祝日です。

聖ビアンネの生涯が今の時代のわたしたちに訴えかける根本的なメッセージは、その頑ななまでに揺るぎのない来世志向の姿勢ではないかと思います。キリスト教の信仰における来世志向とは、イエス・キリストの十字架の死と復活によって開かれた、神のみもとにおける至福の永遠のいのちにあずかることを、わたしたちの人生の究極の目標とするということです。このことは、今日の第二朗読のコロサイの教会への手紙が語っているように、わたしたちキリスト者の、信仰に基づく最も根本的な生活姿勢であるはずです。

今日の第二朗読の聖書のみことばをもう一度、ご一緒に味わって見たいと思います。

「あなたがたは、キリストとともに復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座についておられます」。このように、コロサイの教会への手紙は私たちに呼びかけています。「キリストとともに復活させられたのですから」とは、洗礼によって、わたしたちはキリストの復活のいのちにあずかる者とされたのだからということです。「上にあるものを求めなさい」とは、天において全能の神である父の右の座についておられる、主イエス・キリストとの永遠のいのちの一致を求めなさいということです。上にあるもの、つまり、わたしたちの人生の究極の目標である、イエス・キリストの復活のいのちに結ばれて、永遠の神のみもとにおける至福のいのちへの希望を失うことのないように、地上のものに過度に心を引かれ、執着しないようにとコロサイの手紙は勧めているのです。さらに「あなたがたは死んだのであって」とは、わたしたちが受けた洗礼は、イエス・キリストの十字架の死に結ばれて、それまでの自分の生き方、この世のありように死んで、キリストとともに新たな復活のいのちを生きる者とされたのだからということです。わたしたちが信仰によって受け入れた復活のいのちのさまは、今はまだ十分に明らかになってはいないけれども、キリストが現れるとき、つまり、イエス・キリストの再臨の時に、わたしたちが信じている、わたしたちの中に注ぎ込まれている、その復活の永遠のいのちは、キリストとともに栄光に包まれて明らかになるとの、信仰による希望をコロサイの教会への手紙は述べています。

このような信仰から導き出される、コロサイの教会への手紙が勧めるキリスト者としてのこの世における生き方は、わたしたちの心にはどのように響いて

いるでしょうか。「だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像崇拜にほかなりません。・・古い人をその行いととも脱ぎ捨て、造り主（である神）の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて、真の知識に達するのです」。

このような教えは、今のわたしたちにはあまりにも禁欲的で、魅力的とは思えないかも知れません。

ビアンネの生きた時代のフランスの教会も、それまでのキリスト教的価値観を覆す人間中心主義をモットーとするフランス革命直後の、教会にとっては大きな危機の時代でした。そのような時代にあって、ビアンネは、今日わたしたちが聴いたコロサイの教会への手紙が示しているような、伝統的なキリスト教的価値観に基づく来世志向的な生き方を、身をもって貫き、アルスの教会の人々にそのような信仰を説き続けたのです。驚くべきことに、フランスの忘れられたような小さなアルスの村の主任司祭であったビアンネの、来世志向そのものの、一見時代錯誤のように思える生き方とそのメッセージは、世俗主義に向かって大きく踏み出したあの時代の人々の心を打ち、ビアンネのもとに人々を引き付けたのです。来る日も来る日も、押し寄せる人々のために一日の大半を告解場に座り続けたビアンネがしたことは、人々の罪の告白を聴き続け、コロサイの教会への手紙に語られているように、上のものを求めるために地上的なものを捨て去る決意を励ますことであつたのです。

今日の第一朗読で聴いたみことばは有名な、伝道の書、コヘレトのことばが語るこの世のむなしさを語っています。けれども、聖書が語るむなしさとは、この世の成功から見放された挫折の中でわたしたちが経験するむなしさとは異質なものです。真に人生の究極の目標を信仰によって「上にあるもの」の中に見出すことが出来た者たちにとっては、この世の物事に執着する生き方そのものが、むなしいと言っているのです。

イエスのもとに来て遺産相続の問題の解決を願った今日の福音に登場した人は、イエスのあのおことばを聴いて、どのように感じたのでしょうか。そのあとでイエスが語られた今日の福音のみことばを聴いた人々は、どのような感想を持ったのでしょうか。

コロサイの教会への手紙を書いた使徒も、聖ビアンネも、このような福音を宣伝することを恥とはしなかったのです。わたしたち自身も、この世の全ての人も、人間は常に享樂的で強欲です。自分自身も含めたそのような人間のありように対して、聖ビアンネは教会を通して自分の中に受け継がれたイエス・キリストの福音を愚直なまでに受け入れて生き、フランス革命の余波が続くあの

時代のフランスの片田舎の疲弊しきった小さな教会に留まり続けて、もはや誰にも顧みられなくなってしまったと思われる福音の真髄を果敢に宣伝えたのです。

アルスの聖ビアンネのもとを訪れて、信仰の新たな目覚めを求め、それを体験した人々は、時代こそちがえ、本質的にはわたしたちと変わらない、この世の物事に振り回され、それのみが自分の生きる人生の意味を決すると思いついでいた人々です。そのような人々を前にして、この世の物事への囚われが支配する時代の闇の中で、埋もれてしまった信仰の光の発掘のために、わたしたちがわたしたちの教会の聖人と仰ぐ聖ビアンネはその生涯を捧げつくしたのです。

今週の木曜日、わたしたちの高円寺教会の保護の聖人である聖ビアンネの記念を祝うわたしたちは、今のこの時代に、ビアンネが生きた信仰の姿勢をどのように感じているのでしょうか。聖ビアンネを記念する今日のミサで、ビアンネが、そして、わたしたちの主イエス・キリストが、「あなたがたは、わたしのもとで、何を求めようとしているのか」と問いかけている声を、しっかりと受け止めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高